

# 経営と

# 健康

## 第2回



## 「歴史を彩った人々の食事・好物」

講談師 一龍齋貞花

嗜好品といえば、煙草、酒にコーヒー。もっともコーヒーは一八〇〇年末オランダ人が日本へ持ち込んだもので、江戸中期まではなかった。

タバコは、天文十九年（一五四九）フランシスコ・ザビエルに同行していたポルトガルの船員たちが葉巻を吸っていたという。文禄元年（一五九二）日本に初めて葉タバコが伝わり、新し物好きの豊臣秀吉が喫煙を始めると、側室淀君も吸い始め、女性の喫煙第一号といわれている。

その後女子供まで吸うようになり、徳川家康は、「煙草は不経済であり、火事の元になる。女子供も吸っていて身体にも悪い。キセルは持ち物比べをして贅沢になる」と、喫煙禁止令を出したこともあり、将軍は八代吉宗まで煙草を吸わなかった。

正式に禁煙令を出したのが二代秀忠。江戸城に禁煙席があったかどうか、

聞いたことがないが。愛煙家といわれた柳生但馬守が、師事する沢庵和尚から喫煙をとがめられるや、「では煙を遠ざければ宜しかろう」と言って、部屋の外まで出る長いキセルを作って、「これで煙を遠ざけ申した」。そんな逸話もある。

吉原では、花魁が長いキセルで吸いつけをして客へ。お芝居でも絵になるところだが、馴染みにならないと、吸いつけてくれなかったことでしょう。

武士、町人、職人によってキセルの持ち方が違い、お芝居、ドラマをご覧の時にご注意下さい。

煙草は身体に毒だからと、現在禁煙を奨励しているが、仕事の後の一服とか、いい案が浮かばない時の一服は、吸う人にとってはストレス解消の役目をするだろうし、東京千代田区の年間還元額がかつて六十億円、二十年前四十億、現在は三千億円。吸うなで減っ

たのではなく、キヨスクの本社が千代田区から港区へ移転したから。税収面からみると、煙草の還元税は大きい。但し、喫煙によって病気になる、医療費がと言われると果たして。桑田真澄氏は巨人現役中、ロッカーでの喫煙に異議を唱え、若手選手に注意したというが、各球団今も喫煙する選手は少なくない。政治家も、若い女性の喫煙も少なくありません。

酒と女は仇なり、されど・・・

「酒と女は仇なり、されど仇に巡り合いたし」 名文句ですね。

信長は飲まなかったというが、酒宴の記録や酒好きだったという説もあり、本当はわかりません。明智光秀は下戸。信長は光秀の下戸を知りながら、「わしの酒が飲めんのなら、これを飲め」と、刀を光秀の口元に突きつけた

逸話は有名。

上杉謙信は、高血圧にもかかわらず、夜つびいて酒を飲み、三合は入るといふ馬上杯をかたむけ、梅干し一個で1升酒。会議中廁（かわや）へ立ち、戻ってこないのを見に行ったら倒れていた。典型的な脳卒中、四十九歳で急死。後継者を決めていなかったため、二人の養子が後継者争い。経営者としては失格です。福島正則は酒豪だが酒乱。酒乱の上役に仕える家来は大変。黒田官兵衛の家来で、同じく酒豪の母里太兵衛と名槍「日本号」をかけて呑み比べた逸話は「黒田節」に有名です。

毛利元就の祖父豊元、父弘元、兄興元は酒を飲みすぎて短命、元就は酒に對して気を使ったが、次男吉川元春、その子広家、孫の輝元もかなりの酒好きで、輝元の母親に酒を控えるよう注意。大石内蔵助も酒好き。酒は胸襟を開き、相手の考え方も解ると言ってい



る。酒を酌み交わせば、思っていることを話し、本音が解ると。酒で気心が知れ、お互い心を通わせることが出来るのです。一時社内懇親会をしない会社があったが、コミュニケーションを図るのに、宴会効果ありと多くが復活している。しかし若者は先輩、上役と余り飲みたくない風潮あり。野球選手で先輩と飲みたくないという選手が少なくない。しかし低迷脱出のため一丸となるよう決起集会在催されるから、やはりコミュニケーションには、ノミニュケーション効果有りでしょう。

伊達政宗は、先号でも書いたが、城の中に酒蔵を設け、朝から飲酒も。これは幕府が外様大名を取り潰していたので、謀叛の気持ちはありませんと、幕府の重役接待だけでなく、家安泰に腐心（ふしん）していったのです。

小早川秀秋は、酒の飲み過ぎで黄疸。関ヶ原合戦で裏切り、神経が参りストレスがたまり、酒をあおり二十一歳の若さで死亡。

酒食を過ごして胃腸を患う、大名たちの病気の三大原因の一つ。

癌も寄りつかぬ酒豪・横山大観

大酒豪と言われた画家・横山大観先生。ほとんど食事はとらず酒だけ。「毎日一升も飲んでこんな無病長寿の人は知らない」と、医者が驚いたという。酒だけで九十一歳まで永生き。大酒家にはさぞ羨ましいことでしょう。しかし若い時は、兄弟弟子（でし）の菱田春草、下村観山らと一合の酒で酔ったという。師匠の岡倉天心は、二合、三合の酒で酔うなら飲むなど叱り、弟子たちをしいた。

天心先生、朝十時に料理屋に入り、雨戸を閉めさせ、ロウソクをともして夜十二時まで飲み続ける。同席する弟子たちは死ぬ思い。こうして酒の修行をした大観。やがて師に勝るほど愛飲。広島酒造メーカーへ絵を送って、代わりに酒樽を届けてもらう。こうして絵を集めたメーカーは足立美術館を開館。大観の絵だけでは足りないが、大観の絵の収集の多さで知られている。

文化勲章祝賀会のあと、料亭に四ヶ月間居続けて、毎日二升の酒。全くうそのような話。食べるのは極少量の野菜。石蓆（つわぶき）を好み、漢方の信者とも言われたが特別薬草を食べた様子もない。「米の汁を飲んでいながら飯はいらない」という人もいるが、

ストレスが高じると癌になるというから、大観にとつて酒はストレスを発散させる良薬であったのでは。適量の酒は癌への免疫力があるともいうが、癌もあきれて寄りつかなくなったのか、それとも一日二升が適量だったのか。常人は真似しないことですね。

執権北条時頼を補佐し、のち出家した重時、彼の残した「北条重時家訓」は後世の武家家訓の元となった。その家訓の中に酒席の心得がある。

「酒宴の席で不用意に下品な言葉遣いをしてはならない。自分は戯（たわむ）れでも心ある人は陰で非難する」「二人堅苦しくまじめ腐っていることはよくない。ことに若い人々との会合で重々しく振る舞うことは、かえって様子ぶつていると思われるから、軽く興あるように振る舞うこと」「酒の席では末座にまで常に目を配り、言葉をかけるが良い。同じ酒でも情をかけて飲ませれば人は嬉しく思う」「いかに乱れた席でも、他人の前の酒肴などを取ってはならない」現在にも当てはまる教え。私など耳の痛いことばかり。

お開きになって帰るとき、「赤い顔で大道を通つてはならない。近所なら裏道を通つて帰るべき。そうでなければ

ば日暮れを待つか、牛車（ぎつしゃ）を呼び寄せて帰ること」飲酒運転は絶対いけません。釈尊の弟子祇陀太子（ぎだたいし）は、とつとつとしかお説教が出来ない。しかし酒が少し入ると、弁舌滔滔（とうとう）と。釈迦は「話のため飲んでよい。薬として飲むならよい」と許された。

内村鑑三先生が、日本を代表する五人を紹介したその内の一人日蓮聖人は、酒を飲み、信者から酒を贈られた話がいくつもあり、日蓮宗のお坊さんは安心して飲めますね。禅宗の山門の前に「葷酒山門に入るを禁ず」の碑が立っている。臭いのする野菜（ニラ・ニンニク等）と酒は、心を乱し修行の妨げになるからいけないということ。

昔中国で、酒・塩・鉄を専売品にした時、売れないと困るから「塩はおかず、酒は百薬の長」と。これが現在も使われているが、適度の酒はいいが、大酒は毒。毒にも薬にもなる酒。

酒乱で部下を困らせたり、奥さんから愛想尽かしされまじやう。ゴルフの昼食にビールは水分の補給にはなりませんからご注意ください。されどやめられない、ですね。

